

(七) 布施行

仏が王舎城にいられた頃、ある日、仏弟子、阿那律、大迦葉、大目連、ビンヅルの優れた四人の尊者たちが集まって、伝導のことについて話し合っていた。話題は何時しか「一体この王舎城の中で誰が一番仏法を信じないだろうか。」ということに移って、それは跋提長者と、その姉の難陀だということになった。そこで、この四人の尊者たちで、この二人を濟度しようということになった。

ところが、跋提長者とその姉は、何れも慳貪邪見で、かつて一度も人に施をしたことがなく、二人とも家の周囲には七重の門を造り、門番をおいて守らせ、庭には鉄の網を張って鳥の入ることさえ防いだというのである。

まず尊者阿那律は、衣をつけ鉢をもつて、長者の家にゆき、地中より躍り出た。長者はその時、朝の食事に餅を食っていた。尊者はだしぬけに鉢をつき出して供養を求めた。長者は悪い顔をしながらも少許りの餅を与えた。尊者は受けて去った。長者は瞋恚をおこして、門番を叱つたが、門内に人は入れないという。長者は続いて魚肉を食っていると、今度は、大迦葉尊者が前と同じように現れて、食を乞うた。暗い顔をしながら、仕方なく魚肉を少し供養した。長者は又も門番を叱つたが、彼は知らないと答えた。やかましく二人の尊者を悪く言っているのを、長者の妻が聞いた。彼女は、主人をたしなめて、沙門には大威神力があるので決して幻術をやつたのではないこと、きつと御出家たちは、大きな利益を与えようとなさるのであることをつけ、二人の内、前の方は、カピラエの斛浄王の王子阿那律尊者であつて、出家して道を学び、今では仏のみ弟子の中で天眼第一と云われる尊い方であること、後に来られたのは、大迦葉尊者と言つて、この国で有名な迦毘羅婆羅門の御子息で、仏弟子中で頭陀行(衣食住の貪着をはなれる行)第一と云われる尊い方であることを語つた。

その時、尊者大目連は虚空より長者の家に至り、鉄の籠を破つて大空に坐禅した。これを見た長者は、恐れをなし「汝は、神か鬼か。」と問うた。すると大目連尊者は、言つた。「神でもなく鬼でもない。過去現在未来の三世にわたつて解脱を得たる人である。一切の悪魔をば全て降し、無上道を成就した。我が師を釈迦牟尼仏と云い、我は大目連である。」と。長者が、何の用事かと尋ねたので、尊者は、法を説いて聞かせようと思つと言つた。長者は、もし道士の癖で食物を求めたら、無いと言つてやろう。しかし、少しはこの人の説くのを聞いて見ようと考えた。そこで尊者はその心中を知り、

「如来は二つの布施をお説きになる。私は今法施を説くだろう。」

と言つたので、長者は安心して、聞かしてくれと言つた。だが五大施という言葉が出ると、物のことではないかと心配する、物でないとするや安心して、やがて尊者は、五大施、即ち五戒、即ち、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒を説かれた。長者は、自分は長者で、この五つは何一つ実行せぬものをないという。

この時長者は、大目連に食物を供養する心をおこして、請じて食物を与え、更に小さい敷物を供養しようと思つて、倉に入つて探したが、どれもこれも善い品ばかりで困つて独りためらつていた。その時、目連はその心を知つて、

「施しと心との鬪いは、賢者はすてる。施す時は鬪う時ではない。隨時隨意に布施を行え。」

と説いたので、自ら愧じて白い美しい敷物を尊者に献じた。そこで尊者は「賢者聖人を知ることが布施の第一であり幸福の源である」こと説き、種々説法して、五戒を授け、清い法眼を与えた。長者は全く濟度されて、将来供養の徳をつむことを誓った。尊者ビンヅルは跋提長者の救われたことを聞くと、姉の難陀を濟度しようとした。

その時難陀は餅を造っていたが、尊者ビンヅルは、その舎に至り、地中より踊り出て、食を乞うた。女はそれを見て怒って言った。

「たとい汝の両眼が脱出でようと食はやらない。」尊者は三昧に入つて、両眼を脱出して見せた。すると、難陀は「汝沙門、たとい空中に倒懸しよう駄目だ。」尊者は空中に倒にかかった。女はいよいよ怒つて「いや、身体が煙になろうとやらない。」尊者は煙となった。ますます怒つて「沙門の体が燃えようと駄目だ。」彼は体を盡く燃やした。「たとい沙門よ、身が全て水になろうと食はやらない。」言下に水になった。女は更に「いや死んでもやらない。」そこで尊者は死者の相となった。すると老婆は恐れて「釈迦は、国王が敬つていられる。もし私の家で死なれたとならば後が恐ろしい。」と思ひ、「沙門よもし生き還つたら食をやろう」と言つたので、尊者は三昧より立つた。そこで老女は、少しばかりの粉で餅を造つたが、「これは大きすぎる、もつと小さいのをやろう」とて造りかえるが、何度造つても前のよりは大きい。そこで困つて一番初めのを与えようとすると一切の餅が連なつて離れない。そこで「どうして人を困らすのだ。勝手にとれ。」となげ出した。

その時尊者は「大姉し。私は餅がほしいのではない。唯、汝にみ法を聞かせたいのだ。」

「何が聞かせたいのだ。」

「老女よ、爾は、この餅をもつて世尊の所にゆけ、もし世尊が御誠め下さるなら一緒に承ろう。」と、老婆は、餅を負い、世尊の許に行った。

尊者は世尊に、「世尊よ、これは跋提長者の姉であります、慳貪で施を知りません。願わくは、み法を説き信を与えて心を開解いてやつて下さい。」と願つた。

そこで世尊は、

「汝、その餅を如来及び比丘僧に与えよ。」

と命じられたので、女は世尊及び僧に供養したが、余りが出来た。

仏は更に「今一度如来及び僧に食わせよ。」と言われる。その通りしたがまだ余つた。

世尊は、

「比丘尼及び在家の信者に与えよ。」

と告げられたので、比丘尼や、在家の男女に与えたが、残っている。そこで又も世尊は、

「その餅を世の諸の貧窮者に施せよ。」

と教えられた。しかしそれでも猶余っている。その時世尊は、

「その餅を、淨き地か、淨き水の中に棄てよ。如来を除いては、沙門婆羅門、天及び人民全ての餅を無くすることは出来ない。」
と仰せられたので、難陀は、餅を淨き水に捨てた。すると火焰が水中に上がったので、恐れて世尊の所に往き、丁重に礼拝した。仏は、難陀の心の開けて来たのをお知りになって、四聖諦、即ち苦、集、滅、道の、悟と迷いの因果をお説きになった。女ははじめ、法に対する眼開け、疑を去り、法を得、五戒を授かり、歡喜して世尊に申し上げた。

「仏よ、私は今日より布施を行じて、賢者に奉り、諸の功德を修めるでありますう。」

と誓い、丁重に仏を礼拝して去った。

何かしら考えさせられる話ではある。